

# 勉誠通信

Bensey Newsletter 第十一号

2009.8.17

小論・研究余滴・随想

後の祭り

小林祥次郎



歴史言語文化研究の交流拠点

『水門―言葉と歴史―』

藏中しのぶ

図書館情報学は文学資料の  
諸問題をどう考えていくか

岡野裕行

バリの村・日本の村

永野由紀子

漢字・仮名活字の  
世界的な位置づけ

小宮山博史

小論・研究余滴・随想など本誌にお寄せ願います。

新刊・近刊ニュース

- ・『日本古代の宗教と伝承』
- ・『宋銭の世界』
- ・人間愛叢書 『こんなに優しい日本人』
- ・人間愛叢書 『愛と信義の人』
- ・人間愛叢書 『長崎の鐘』
- ・人間愛叢書 『土佐の竜馬』
- ・人間愛叢書 『無法松の一生』

勉誠通信 バックナンバー

<http://www.bensey.co.jp/mm.html>

# 後の祭り —— 日本古典博物事典を書き上げて ——

小林祥次郎

いつものことではあるが原稿を書き終えて印刷も終わってから、付け加えればよかつたと思いついたり発見したりすることがあるものである。今度の『日本古典博物事典』でもそういう例がいくつかある。反省の意味で、それらを記す。

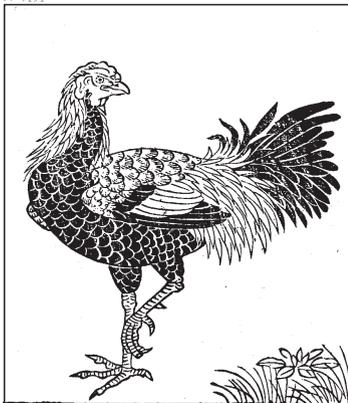
1 『訓蒙図彙』の図をもつと掲げるべきであった。特に、鶏の項目に「唐丸」と「チャボ」の図を入れるのを忘れていた。マナヅルの絵も入れればよかつたと思う。ほかにもあるかもしれない。『訓蒙図彙』の絵は、現代の立場から見れば必ずしもリアルではないが、かなり上手な絵師の手になるもののようにあり、当時はこのように考えていたという意味で参考になるもので

ある。

2 「海鼠腸このわた」について、桶に入れることを記したものととして、『御湯殿上日記』の慶長八年（一六〇三）三月一

日に徳川家康が朝廷に進上した記事を引用したが、室町時代の『庖丁聞書』に、「海鼠腸は桶にても皿にても出すもの也」とあるのに、後で気づいた。3 「蟬」の語源説に漢字音センからとする説があるのを、蟬（セン）の韻尾はnであるから、セニにはなつてもセミにはなるまいと記した。これはわたくしの創見であるつもりでいた

鶉こんき 俗云たりもる  
俗云たりもる  
俗云たりもる  
俗云たりもる



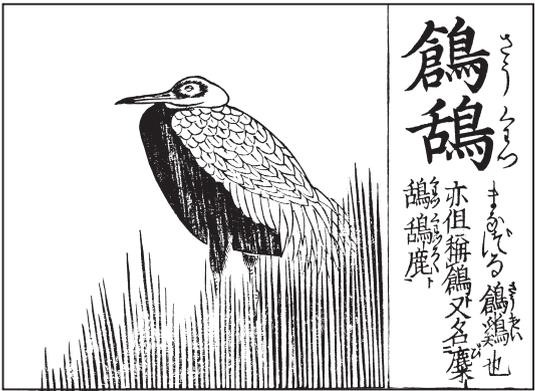
矮雞たいき 俗云ちやぶ



『訓蒙図彙』より「唐丸」「チャボ」

⇒ 目次に戻る

鶉こんき 俗云たりもる  
俗云たりもる  
俗云たりもる  
俗云たりもる



『訓蒙図彙』より「マナヅル」

が、鈴木服あきらの『雅語音声考』を見ていたら、蟬セミハ此字ノ音ニヨレリト云ハ非ナリ、若此字ノ音ナラバ、セニト云ベシ。セミトハイフベカラザル韻ナリとあるのを見つけた。

これは『雅語音声考』の、漢字にも音声による語があるとする中にあるもので、他に、

鶏ケ (カケト同音)  
鷹カ (カリ)  
鴉カ (鴉ノ古名ナリ。カラスノカト同音)  
雀ス (ス、メノスト同音)  
を挙げています。これらも漢字の箇所に引けばよかつたと思う。(オネガイ この本をお求めくださった方は、ここまでをプリントして貼り付けていただければ幸いです。) 以下は反省ではなくボヤキである。4 文献に見える地名が現在のどこであるのかをできるだけ注記するようにした。旧国名には現在の都道府県を記した。わたくしの住む栃木県は下野国がほとんどそのままであるから問題はないが、武蔵国は東京都、埼玉県、それに神奈川県の一部をも含む。武州多摩郡国分寺村は東京都国分寺市と書けるが、武蔵国とだけあるのには三つ書かなければならない。武蔵国の海岸とある場合は、東京都・神奈川県とし、それ以外は東京都・埼玉県とした。

地名でいちばん困るのは、昭和・平成の二度にわたる町村合併があつたことである。一例をあげる。徳川家では、正月の祝いの膳に兎の吸い物を用いる慣例になつていたという。その起こりについては諸説あるが、一説に、徳川家の祖先である源有親が、上野国徳川を領していたが、戦乱でそこを離れ、永享十一年（一四三九）十二月下旬に信州の林藤助光政を訪ね、貧しい光政が雪の中で得た兎を元日に吸い物にしてもてなした、と言う（『古事類苑』に引く『官中秘策』によつたが、『三河後風土記』（四）にもあるのを見つけた。この上野国徳川は、参照した平凡社や角川書店の地名大辞典には、群馬県新田郡尾島町徳川と書いてある。ところが、この尾島町は、平成十七年三月に合併して、群馬県太田市徳川町になつた。これはたまたま分かつたので書き込むことが出来たが、確認できずに、元の地名のままになつていくことが多いのではないかと

# 日本古典博物事典 動物篇

文献の大海から躍り出る動物たち——日本人は動物たちをどのように感じてきたのか、自然とどのように向き合ってきたのか？古代から近現代まで多種多様な文献を博捜し、日本人の心性を明らかにする画期的な大辞典。

小林祥次郎 著  
A5判上製・定価九九七五円(税込)  
畜獣◎犬・猫・鼠・兎・猿・鹿・狐・狸・禽鳥◎からす・鴨・うぐいす・おしどり・燕・雀・鶯・孔雀・鷹・虫介◎蛇・蚕・蝶・蚊・蠅・とんぼ・こぎぶり・まむし・鈴虫・蜂・竜魚◎鯉・鮒・鯰・鯛・鰻・くらげ・なまこ・鰻・鮪・など、約100種を掲載。



と懸念している。

5 和年号には西暦を注記した。和年号について、以前から気掛かりであったことがある。今年を例にとれば、平成二十一年の陰暦の元日は陽暦では一月二十六日である。もし現在も陰暦を使っていたなら、平成二十年の十二月六日から三十日まで、西暦二〇〇九年のはずであるが、注記では二〇〇八年としてしまっている。右の源有親の話も、永享十二年の元日は陽暦の二月十三日であるから、前年の十二月下旬は西暦一四〇〇年になる。しかしそこまで厳密には記さなかった。

6 度量衡にも悩まされた。尺貫

法はできるだけメートル法に換算して注記することを心掛けたが、度量衡は時代によって少しずつ異なるようなので、現代の尺貫法しか知らず、参考書も知らないわたくしには、どうすることも出来なかった。現在の一里は三十六町(約四キロ)であるが、太閤検地以前は六町と聞いていたので、里についてはそういう処理をしたくらいである。まして「両」とか「斤」とかいふ重量の単位がどのくらいのものなのか分からなかった。注を施さなかった箇所もあるし、施しても誤りがあるのではないか危惧している。

メートル法を記すのに、横書きであ



## 歴史言語文化研究の交流拠点 『水門―言葉と歴史―』

### 藏中しのぶ

(大東文化大学教授)

水門の会編『水門―言葉と歴史―』第二十一号が、水門の会代表・藏中進一周忌の追悼号として刊行されました。

本号には、藏中進と学問の場を共有し、心をかよわせあった国内外の研究者が論文二十八本、追悼文十四本を寄せ、同志として共に歩んでこられた長田夏樹先生の回想「久しかるべし」・水門の会「今昔」を収録しております。

藏中進の机上に遺された遺稿「奈良朝初期の白話漢語辞書―楊氏漢語抄』『弁色立成』『漢語抄』については、八世紀初頭には、日本人の手によって当時の中古漢語習得のための口語体の漢語辞書が編纂されており、それが実用にも供されていたことを、『和名類聚抄』に引かれた佚文からあきらか

にし、語彙についての攷証を加えたもの

です。未定稿であったため、寺村政男がその用例を補い、「増補注 奈良朝初期の白話漢語辞書―楊氏漢語抄』『弁色立成』『漢語抄』について」を付しました。

「水門の会」は、一九六二年、神戸市外国語大学の長田夏樹先生と藏中進の『唐大和上東征伝』読書会に発祥しました。翌年7月、会誌『水門―言葉と歴史―』を創刊し、爾来、四六年にわたって二十号を刊行してまいりました。

会の名称「水門(みなと)」は、発祥の地・神戸の「みなとの祭(現・神戸まつりの前身)」の日に発足したことにちなみ、『万葉集』の「水門(みなと)」の表記に拠ります。設立の趣旨は、専門

的研究はもちろん、学問分野相互にまたがる学際研究やその間隙を埋める研究、また、研究上の発想や専門外のテーマについて気楽に発表し、自由に論じあえる場にしようということでした。

第二十一号の刊行を機に、勉強出版の全面的なご支援のもと、『水門―言葉と歴史―』は体裁をリニューアルし、神戸・東京で、それぞれ年二回の研究発表会「例会」を開催することになりました。

昨今の学問の国際化・学際化はめざましく、海外の日本研究との共通基盤の形成が必要とされています。大学の枠を越えて、若い世代や留学生の実証的な研究の基礎力を育成するため、「水門の会」では、正倉院文書「訓点資料・書誌学などの「研究基礎講座」や「研究会」を随時開きます。

「水門の会」に会費・入会金はありませんが、論文執筆者の掲載料で、会誌『水門―言葉と歴史―』を刊行します。

×メルマガジンの登録申し込み・取り消しはこちらから

近年の大学・大学院を取りまく状況に鑑み、専門分野の研究者による育てる意味でのレフェリー制をとることにしました。×切は毎年二月末とし、四月刊行の予定です。

「水門の会」は、発足以来、さまざまなジャンルの研究者がつどい、お互いの研究を尊重しつつ、ざつくばらんな雰囲気の中で斬新な発想をぶつけない、自由に論じあうなかで、新たな学問研究の可能性を切り拓いてきました。この良き伝統を大切にしつつ、海外の日本研究とも連携をはかり、真の意味での学際・国際研究を発信してまいります。詳しくは、「水門一言葉と歴史」ウェブ・サイト (URL: <http://www.asukanet.gr.jp/cha-san/minato/index.htm>) をらんぐだわす。



## 水門一言葉と歴史 第二十一号 追悼 藏中進先生

水門の会編  
A5判並製・定価三二五〇円(税込)

歴史学・文学・言語学・民俗学など諸学の粋を集め、ジャンルを越えた新たな学問世界への扉を開く。  
歴史文化研究の交流拠点 開港。



### ◆目次◆

- 巻頭言 再び新たな船出に当たって (高橋庸一郎) / 奈良朝初期の白話漢語辞書 (藏中進) / 増補注 奈良朝初期の白話漢語辞書 (寺村政男) / 『釈氏要覧』本文と索引に言寄せて (藤善真澄) / 薬師寺仏足石記再調査書 (東野治之) / 『南天竺婆羅門僧正碑并序』注釈 (藏中のぶ) / 赤塚史・朱一飛・土佐朋子・松山匡和・山口卓也・李・満紅) / 『南天竺婆羅門僧正碑并序』注釈「語釈索引」(山口卓也) / 宝龜二年閏三月の二通の過状 (大平 聡) / 日本古代の漢字使用にみられる借筆による減画をめぐって (井上 幸) / 訓の幅、語義の幅、表現の幅の意味 (吉田比呂子) / 大伴坂上郎女の歌二首 (梶川信仁) / 日本・イタリアにおける滑稽詩 (シリオーレ・マリア・キアラ) / 歴史・伝説・歌 (大嶋 仁) / 太陽信仰と補陀洛 (神野富一) / 遊仙窟と「崔致遠」(濱政博司) / 『日本書紀』における異界説話の構造と特質 (藤本 誠) / 渤海使節と三勅撰漢詩文集 (波戸岡 旭) / 慶滋保胤「晚秋過參州薬王寺有感」詩序訳註 (吉原浩人) / 于立政の『類林』と日本の『類林』 関連書物 (福田俊昭) / 定家「韻字四季歌」の詠作 (藏中さやか) / 悲憤沈静の世界 (安保博史) / 旧制中学生の紀行文 (福井淳子) / 芥川小説『首が落ちた話』の素材 (林 憲) / ファンタジーというジャンルと様相理論「可能な世界」(アウンマン・武井典子) / モンゴル文化考察紀行 (高橋庸一郎) / 上代日本語の母音 (早田輝洋) / 『倭名類聚抄』と双声・疊韻 (古屋昭弘) / 『劉希必金銀記』をめぐって (佐藤晴彦) / 『満文三回志』における尖団音の表記について (鋤田智彦) / 『満漢合璧庸言知要』の研究・その一 (寺村政男)
- 追悼文 長田夏樹 / 山下宏明 / 廣岡義隆 / 後藤昭雄 / 石見清裕 / 新聞一美 / 波戸岡 旭 / 仁平道明 / 原田松三郎 / 高橋庸一郎 / 神野富一 / 林 忠騰 / 井上 幸 / 吉原浩人
- お礼のことは (藏中のぶ) / 久しかるべし (長田夏樹)

## 図書館情報学は文学資料の諸問題をどう考えていくか

岡野裕行

(二松學舎大学文学部図書館司書課程非常勤講師)

文学館の位置付け  
博物館は収集や展示の対象とする資料の主題の違いにより、さまざまな種類に分けられる。特に、文学資料を対象とした博物館は文学館と呼ばれる。文学館は社会教育施設の一つと見なされておき、作家の直筆原稿や初版本、遺品などを展示することで一般市民の文学に関する知的欲求に応えている。そのため、学問的には長年にわたって博物館学の領域に組み込まれる形で研究が進められている。

### 博物館としての文学館

さて、前述のように文学館は博物館の一種と見なすことができるが、それは「文学博物館」というような、より

説明的な表現に置き換えることができる。あるいは「博物館としての文学館」という言い方も可能だろう。例えば、世田谷文学館(東京都 一九九五年設立)は資料展示のような博物館としての機能を重視した施設を念頭に活動しているが、これはつまり、「文学博物館を略して文学館」と用語が変化したものと同義である。

しかし、今日において文学館に言及するすべての書き手が、以上のような認識を共有した上で文学館という用語を用いているかは疑わしい。あるいはまた、それを受け取る側の読み手の文学館認識も同様である。現状において文学館という用語は、少なくとも博物館や美術館ほどには社会的に認識さ

れていない。ならば、一般的にはむしろ文学館という用語の意味を深く考えず、無頓着に使われる事例の方がはるかに多いだろう。

### 図書館としての文学館

例えば、日本の文学館の中心的存在である日本近代文学館(東京都 一九六二年設立)の構想段階の仮称が近代文学図書館だったことに、どれだけの人が意識を向けているだろうか。その仮称が示すように、日本近代文学館は文学を専門領域とした「文学図書館」、すなわち「図書館としての文学館」を念頭に設立された施設である。つまり先ほどの世田谷文学館とは異なり、「文学図書館を略して文学館」と用語が変化していることになる。

文学の博物館を作ろうとした結果として文学館と呼ばれるようになるか、あるいは文学の図書館を作ろうとした結果として文学館と呼ばれるようになる

小論・研究系系・随想など本誌にお寄せ願います。詳細については「投稿募集」をご覧ください。

「Xメールマガジンの登録申し込み・取り消しはこちら」  
 るかは、各文学館の設立当初の理念の違いによるだろう。ならば、そのような二種類の成り立ちによる施設のいずれもが、単純に文学館という用語で呼ばれてしまう状況に注意を払うことは重要である。その点を意識しない限り、文学館についての議論が食い違うおそれは常につきまとう。

### 図書館情報学と文学館研究

さて、個人的な学問的背景が図書館情報学である筆者が特に重要視しているのは、文学館が有する図書館としての機能である。図書館情報学の立場から文学館を考察対象とする研究視点は珍しいが、現状においてそれを積極的に取り上げている研究者はおそらく筆者一人のみである。この研究者不足の状況は、「図書館としての文学館」の立場を確固たるものとするにはおそろしく不十分である。

例えば、二〇〇八年三月に橋下大阪

ことができる。そのような問題意識を図書館情報学の立場から突き詰めて考えることで、図書館や文学館の新たな可能性を見出すことができるだろう。

### 今後の展望

さて、筆者は以上のような研究基盤の脆弱な状況を打開するため、図書館情報学の立場から文学館研究を進めるための「文学館研究会」(<http://www.literarymuseum.net/>)という研究団体を、二〇〇九年一月に個人的に発足させている。未だ看板のみで今後の研究の方向性は模索中だが、それについてはぜひとも諸先生方のお知恵を拝借したい。「図書館としての文学館」という主題について、忌憚のないご意見を頂戴できると幸いである。



小論・研究余論・随想など本誌に寄せて願います。詳細については「投稿募集」をご覧ください。

府知事によって大阪府立国際児童文学館の廃止と大阪府立中央図書館への統合問題が引き起こされたことは記憶に新しい。橋下は大阪府立国際児童文学館について「通常の図書館となぜ分離しているのかわからない」という意見を述べていたが、この橋下の疑問に対して有効な回答を表明できた図書館情報学者は筆者も含めて皆無である。結局は有効な反対意見を何も提出できないままに統合が決定事項となつてしまったが、「何もできない」という状況が現時点での文学館研究の惨憺たる有り様である。端的に言えば、図書館情報学の立場からの文学館研究の蓄積は皆無に等しい。

### 文学資料に関する諸問題

しかしこの統合問題により、文学館の存在基盤を揺るがす出来事が引き起こされたときに、有効となる理論的基盤はまったく確立されていないことが

明るみになったとも言える。つまり行政側が一方的に文学館と図書館とを同種の施設と見なしたことで、結果として図書館情報学はその枠組みを再考する必要に迫られたことになる。図書館情報学は文学館という施設について、今後どのような形で考察を深め、どのような形で文学館の存在を位置付けていくのだろうか。大阪府立国際児童文学館の統合問題は、そのための意識改革を図書館情報学に求めている。

図書館情報学の観点から文学館の諸問題を検討しようとする、文学資料の収集、保存、公開、流通などの論題が浮かび上がってくる。これらを図書館情報学の用語に置き換えてみれば、専門資料論(文学資料に関する専門資料論や学術情報流通論(文学研究に関する学術情報流通論)の領域に該当するものと見なせるだろう。つまり、文学館の問題は「文学資料をどのように取り扱っていくか」という問題意識に置き換える

### 日本の作家 100人

## 三浦綾子 人と文学

岡野裕行著 四六判上製・定価二一〇〇円(税込)

三浦綾子は、自らがクリスチャンであること、伝道のために小説を書いていることを、作家としてのデビュー当初から公言してきた。作品のいたるところにクリスト教の思想が散りばめられ、自らの作品が読者を「聖書」へと導くための伝道的手段となることが、己の作家としての役割であるとの思いを、「貫して持ち続けてきた稀有な作家であった。三浦綾子の小説世界の根底に流れているクリスト教への志向を、その人物像や生い立ち、作品から追う。」

### 目次

第一章 作家の誕生	第六章 結婚
第二章 少女	第七章 創作
第三章 戦争	作品案内 『水点』『塩狩峠』『積木の箱』『母』『銃口』
第四章 転落	三浦綾子略年譜
第五章 キリスト教	主要参考文献目録

## 三浦綾子書誌

黒古一夫監修・岡野裕行著  
 A5判上製・定価二五二〇円(税込)



近代文学研究の基底となるべき近代の「書誌学」がここに！ キリスト者として、作家として、人の心とこの社会の「罪」「エゴイズム」「生命」を問い続けた三浦綾子。その多岐にわたる活動を網羅し、「事実」書誌の側面から三浦文学の全貌に光をあてる。	近現代の「書誌学」がここに！
【目次】	
◆実証主義◆ 研究の基底	
第一部 著書目録	第二部 初出目録
一、単行本	七、大活字本
二、作品集/全集/選集	八、文学全集
三、文庫本	九、奇稿エッセイ
四、共著/対談/インタビュー	十、点字本
五、編著	十一、音声出版物
	十二、映像出版物
	十三、翻訳
	第三部 参考文献目録
	一、単行本
	二、書誌
	三、雑誌特集
	四、三浦光世関連本
	五、文庫解説
	六、その他参考文献初出

# バリの村・日本の村

永野由紀子

(山形大学人文学部准教授)

バリを訪ねるようになって四年になる。フィールドノートには、十三回分の記録がある。毎回十四日ほど滞在するので、この四年間のうち二百日近くを、バリで過ごしたことになる。日本のイエやムラの研究を専門とするわたくしが、これだけの時間をバリ研究にさくようになるとは、思いもしなかった。いわば、バリに「はまって」しまったことになる。でも、今考えると、「はまる」理由はあった。

## バリの水利組織（スバック）

バリは、稲作社会である。スバックという名前のバリの水利組織は、カタカナの日本語でもそのまま通用するほどで、世界的にもその名が知られている。有限

ク（ジャワ更紗）といった移住者の自営業の工場から排出されたものが少なくない。だが、ゴミの大半は、ビニル袋やペットボトルといったプラスチック・ゴミである。さらに、ヒンドゥー教のお供え物やイスラム教徒にとつては聖なる動物である豚の死骸も混ざっている。ゴミ問題の元凶は、イスラム教の移住者というよりも、ヒンドゥー教のバリ人の生活様式がビニル類を多用する生活に変化したためであり、にもかかわらず、ゴミを用水路や道端にポイ捨てる昔ながらの習慣が変わらなかったためと言わざるを得ない。

## イスラム教の移住者

プモガン村との出会いは、農地の宅地化が誘発する小作の失業問題や灌漑用水の汚染に悩む混住化した近郊農村の農民と知り合うことであった。また、同時に、バリに仕事をもとめてくる隣のジャワ島やロンボック島からのイ

の水を分配し、一枚一枚の田に灌漑用水をいきわたらせるための水利慣行と、田植えや稲刈りといった共同作業の必要から結びついた凝集力の強いバリの村の組織を見ると、現象面の違いにまどわされなければ、水田稲作を基調とする社会は、ここまで似ているのかと驚かされる。バリを繰り返し訪れる日本人やバリに移住する日本人が、よく口にする「昔の日本がバリにはある」という感想は、水田や棚田の景観だけでなく、祖先崇拜や自然にたいする畏敬の念の深さに、昔の日本を見て、懐かしさを覚えるからであろう。こうした感慨もまた、バリと日本がともに稲作社会であり、生活組織に共通性があることに由来すると考えられる。

スラム教の移住者との出会いでもあった。ロンボックからの出稼ぎ農民を、バリではブルー・ロンボックと呼んでいる。彼らは、3K労働を厭わず、バリの建築・土木の現場で、煉瓦工や左官、大工などのブルーカラー労働に従事している。ジャワからの移住者のなかには、観光産業で一旗揚げることをもくろむ企業家もいれば、農業雇用労働者、屋台引き、露天売りなど、いろいろいる。

バリ人は、ロンボックからの移住者には対抗意識をもたないが、ジャワからの移住者には、敵愾心を燃やす。「移住者は肉団子を買って土地をかうが、バリ人は土地を売って肉団子を買う」という爆弾テロ後のバリでよく聞かれる標語は、勤勉なジャワ人の移住者が、屋台でインドネシア人が好む軽食の肉団子入り麺を売って貯めたお金でバリの土地を買い、怠惰なバリ人が先祖代々の土地を手放すようになる事

## ゴミ問題

わたくしの研究は、バリ社会のこうした「変わらぬ」側面からではなく、グローバル・ツーリズムによって大きく変化した「変わるバリ」から始まった。最初に訪れたプモガン村は、バリの州都デンパサールの中心部からわずか七キロメートルしか離れていない近郊農村である。グローバル・ツーリズムにともなう産業の発展につれて、バリでは、ゴミ問題が深刻な課題となつていく。観光産業や観光客の膨大なゴミの問題も大きい。JICAの生活ゴミも無視できない。JICAのマンガローブ・インフォメーション・センターの専門職員羽鳥祐之さんのプモガン村のゴミ問題の話に興味を覚えて、調査を始めることにした。

プモガン村の住民は、ゴミを投棄したのは、移住してきたイスラム教のジャワ人だと言う。たしかに、ゴミのなかには、家具や硝子細工やバティックにたいする警句であろう。この標語は、観光に浮かれるバリ人の怠惰を戒めるだけでなく、バリ人の土地喪失への危機意識をも語っているように思われる。

## 棚田の桃源郷

今、わたしは「変わらぬバリ」をもとめて、バリの米倉タバナン県のジャティ・レイ村の調査を進めている。ジャティ・レイは、バトゥカル山の麓の標高七百メートルのところにある美しい棚田が広がる村である。化学肥料や農薬を使わない伝統的な農法のもとに、よく管理された肥沃な土壌の水田で、先祖伝来の赤米を栽培するジャティ・レイの景観は、桃源郷を思わせる。収穫期には、アニアニと呼ばれる穂刈の道具を用いたバリの農家の女性による昔ながらの稲刈り作業の風景が見られる。

## 変わるバリ、変わらないバリ Bali: Changed and Unchanged

倉沢愛子・吉原直樹編

A5判上製・定価三九九〇円(税込)

バリの多様性とは何か？バリはなぜ変容し続けるのか？ バリの伝統の本質とは？ イスラムが多勢を占めるインドネシアにあつて、ヒンドゥーを基盤とするバリの位置付けを確認、観光イメーজに隠された真の姿を見通す。バリ人の生活へ立ち入ると、その社会が実に多面的な顔をもっていることがわかる。近年のグローバル化の進展とともに、バリ社会の、外に広がるベクトルと内に閉じるベクトルのせめぎ合いが強く感じられる。本書は、混沌とした現代のバリの背景である歴史・文化・社会構造を多様な視角でつなぎ合わせ、バリの現在と将来を包括的かつ具体的に捉える。



### バリの「屋敷地共住集団」

タイ研究の水野浩一によつて、タイ農村の生活組織が「屋敷地共住集団」と命名されて以来、その言葉が広く受け入れられている。母系社会タイの「屋敷地共住集団」では、農地は基本的に女子均分相続によつて継承され、親夫婦と娘夫婦が、同一の屋敷地に共住する。これに対して、父系社会バリでは、農地は男子均分相続によつて継承され、親夫婦と息子夫婦が、同一の屋敷地に共住する。それぞれの夫婦家族は、困つたときは互いに助け合うが、基本的に、別居・別食・別家計の独立した世帯である。親が高齢になると、い

れかの息子夫婦家族の一員になる。長男単独相続の日本のイエとは、現象面では、明らかに異なる。これに対して、男子均分相続の父系出自集団として知られる中国の宗族と、バリの「屋敷地共住集団」とは、現象的には似ているものの、本質的に異なっている。中国の宗族では、娘は婚姻後も姓を変えず、生家の父方親族集団に属する。だが、バリでは、日本の嫁入りと同じように、娘は婚姻後、夫の祖先を祀る父方親族集団の一員になる。男子がいけない場合、中国の宗族では、父方親族から養子をもらうことで、宗族の財産を分散させないようにする。これに対して、ジャ



## 漢字・仮名活字の世界史的位置づけ

### 『活字印刷の文化史』

小宮山博史

(佐藤タイボグラフィ研究所代表)

「活字」という言葉は、その性格を的確に表現しています。どこに使われなくても同一の文字の字形はいつも同じであり、組み替えが自由で、いろいろな書籍に繰り返し使うことができるというのが特徴です。同じ文字が同じ字形であることは、大量に投下されたとき文字書体が本来持っている個性を薄める効果があり、それゆえどのような内容にも適応できる特性を獲得したことになります。まさに「生きている文字」なのです。英語の Movable Type も、その特性をうまく表わしているのではないのでしょうか。翻訳書では可動活字と訳されることが多いようですが、これはただ活字と訳すほうが適切だと思いません。活字は一般的には金属活字を指

すことが多いのですが、その役割を考えると写植もデジタルフォントも活字と総称してもよいものです。それらは生成技術の違いだけであつて、役割はどれもまったく変わらないからです。もし活字がなかったらどうでしょうか。それぞれの国家や民族が持っている独自の文明や文化は、自国のみならず他国にも速く正確に伝わるものが無かったに違いありません。そのような重要な伝達要素である活字ですが、これほど人びとに軽んじられている存在もありません。人びとは活字は水や空気のように自然にあると思つているようです。しかし活字開発が職人や技術者の苦闘の積み重ねの上に存在しているのを知れば、活字にたいする認識は

変わってくるのではないのでしょうか。

今回刊行された『活字印刷の文化史』は、日本でも数少ない活字史の最新の論考を集めた研究書ですが、読者対象は活字史に興味をお持ちの方だけに限定したものではありません。むしろ活字を日常的にあつかうデザイナーや書籍・雑誌の編集者の方々によつて読まれることを願つて編集された側面もあるのです。活字にたいする理解が人びとの中に深まること、それは言葉をかえれば日本語のタイボグラフィ世界を豊かにすることにほかなりません。自分たちが日常使つている活字書体を支えているさまざまな事象を知ることが、デザイナーや編集作業に厚みを加えることになるのです。

活字は中国の四大発明の一つです。その発明者は北宋の平民畢昇であることや北宋の人沈括は『夢溪筆談』に書いています。活字印刷術はルネサンス初期にヨーロッパに伝わり宗教

改革への道を開きました。中国での活字の発明はヨーロッパの活字印刷の祖グーテンベルクよりも四百年も早かったのですが、残念ながらヨーロッパのように発展はしませんでした。中国人は自国の誇るべき発明にたいして冷淡でした。中国の印刷術を早くから評価し、その歴史をはじめて記述したのはアメリカ人の Thomas Francis Carter 氏、一九二五年に出版されました（日本語での翻訳は『中国の印刷術』平凡社東洋文庫、一九七七年）。本書の劈頭を飾っている中国印刷史の泰斗張秀民先生は「わが国の発明である活字の印刷史を、なぜ中国人が最初に記述できなかったのか」と悲憤慷慨され、活字印刷史の研究に生涯をかけたのは有名な話です。張秀民先生の苦闘の成果は多くの中国人研究者に引き継がれていますが、それはあくまでも通史の世界であって、たとえば現在に繋がる興味ある近代活字の各論の研究は、何歩雲先

しれません。たしかに本木昌造の業績を過小に評価することは慎まなければなりません、正当な評価と位置づけが歴史研究の大前提であることを考えれば、日本の近代活字研究は端緒にいたばかりであるといつてよいかもしれません。宮坂氏のこのアプローチはその先達として今後とも期待されるものです。

明治二（一八六九）年、上海美華書館から日本に導入された近代活字はほとんどが漢字であり、仮名活字については日本で開発するほかはありませんでした。特に自由奔放な平仮名を正方形のボディに収める作業は、活字職人を悩ましたに違いありません。書体の洗練はその苦勞の積み重ねですが、活字史研究者はやはり沈黙したままで発展過程を明らかにしようとはしませんでした。これは一文字ずつの年代的变化を克明に観察する作業で、気が遠くなりますが、それに敢然と挑戦したのが

生の論考「中国活字小史」（初載は『中国印刷年鑑』。再収『活字印刷源流』印刷工業出版社、一九九〇年）を最後にまつたく手つかずのままに捨て置かれていました。この論考の主要部分である宋朝体と楷書体の開発史は長く「定説」として引用されてきましたが、執筆者の一人孫明遠氏は敢然とその定説に挑戦し、みごとに「定説」を書き換えています。孫氏の論考「二〇世紀前半における中国人による「做宋体」と「楷書体」の開発」は、国際都市上海における一九二〇年代から三〇年代、欧米の潮流を導入した商業デザインの展開と中国人によって開発された宋朝体と楷書体の多様さを記述することで、欧米人による印刷事業の寡占状態を脱し、中国人が印刷技術面で自立していく様子を描いています。このとき開発された宋朝体と楷書体の一部は日本人の手によって密かに複製され、日本の活字書を豊かにしていることは案外知ら

内田明氏です。内田氏の論考「築地体後期五号活字の出現時期と「アンチック」活字について」は、国立国会図書館近代デジタルライブラリー登録資料を一点一点調査し、それぞれの文字の異同の有無を検討することで、東京築地活版製造所の代表的五号仮名がいつ全面的に改刻されたかを明らかにしています。研究成果が「推測」ではなく「事実」であること、これに勝る説得力はありません。この方法論は活字研究の基礎として、文献資料調査とともに研究の一方を支えるものですが、やはりおろそかにされていたのです。

本書のなかで構想の大きさを見せるのは劉賢国氏の論考「韓国最初の活版印刷による多言語『韓仏辞典』の刊行とそのタイポグラフィ」です。日本最初の近代的和英辞典がアメリカ人宣教師ヘボンによって著され上海で印刷されたように、韓国初の金属活字印刷による『韓佛辞典』も同様にパリ外国宣

れています。

漢字や仮名活字は使用国独自の開発と想われていますが、実際には欧米人の布教活動と東洋学・日本学の進展によって開発されたもので、それが上海に集積され東アジアへと波及していったものです。宮坂弥代生氏の論考「美華書館史考——開設と閉鎖・名称・所在地について」は、大きな影響力を發揮した北米長老会印刷所美華書館について、多くの資料を渉猟し実態を明らかにしたものです。日本に導入された近代印刷術と活字製法はこの印刷所によって伝えられたもので、それを基礎として今の活字世界が作られているのは言うまでもありません。美華書館の存在は早くから日本の活字史に登場していますが、重要な存在でありながらその影響力はなぜか無視され続けていました。もしかすると日本の近代活字開発の祖として尊敬を集めている本木昌造への遠慮がどこかにあつたのかも

教会の宣教師によって横浜で印刷刊行されました。劉氏はこの辞典が編集されていく過程から論を進め、韓国語活字の開発と韓国漢城（現ソウル）に渡っていく経緯を述べています。そして活字制作者とその活字の特徴、多言語混植の分析というタイポグラフィ研究の基礎的プロセスを踏み外さず論を進めているところが優れています。たぶん韓国における近代活字の研究論文としては初めての試みではないかと思われまます。近代活版術に裏打ちされた出版事業が、朝鮮王朝の社会と文化に大きな影響をあたえたことは執筆者が指摘するところです。ここで思い出すのは、韓国語活字を明治一〇年代後半東京築地活版製造所でも開発し、複雑な組版をいとわず康熙字典の翻刻書である『明治字典』の刊行に使われたことです。『明治字典』の編集者の一人である李樹廷は、日本でキリスト教の洗礼を受けた最初の韓国人ですが、朝鮮政府の

# 文化財と古文書学 筆跡論

湯山賢一編

四六判上製・定価三七八〇円(税込)

新たな「筆跡」学の構築に向けて。

筆跡論、筆跡研究は、つまるところ真偽の鑑定に帰着する。その一つの典型が文化財指定といえよう。いま必要なのは、単に書風に捉われるのではなく、書誌学はもとより、古文書学上からの伝来、様式、形態、機能、料紙などの論を併せ検討する総合的な筆跡論を考えることである。

## 三大編纂物 群書類従・古事類苑・国書総目録の出版文化史

熊田淳美著

四六判上製・定価三三六〇円(税込)

未曾有の大叢書は如何に編まれたのか――

日本文化研究を牽引した江戸・明治・昭和を代表する大出版物、群書類従・古事類苑・国書総目録。本来、国家的事業として行われるべきこの事業が、民間資本により行われた、その歴史的背景を探る。

## B・H・チェンバレン 『文字のしるべ』

岡増 裕剛 編著

変形判上製函入・定価二九四〇〇円(税込)

近代日本の国語学の成立・発展に多大な影響を与えたチェンバレンの『文字のしるべ』。国語学・漢字研究・日本文化研究に必備の基礎資料となる影印編と詳細な研究編から成る。本書は、一八九九年刊行の初版に基づく影印編と、編者による研究編からなる。研究編では、従来の先行研究と資料そのものの調査・分析により、日本語教育書としての価値を再認識し、多数残存する当時の使用形跡から美用度の高さを証明した。また、本書の「基本漢字」の分析により、近代日本の常用漢字や符号化文字集合の成立に影響したこと言及する。



命令により帰国させられ、帰国後密かに処刑されています。日本における韓国語活字の開発には、将来の韓国併合を視野にいられていた可能性はないのでしょうか。劉氏は『明治字典』の研究・分析を進める準備をしているようですが、その成果が待たれます。

しかし、漢字・仮名活字と欧文活字で多言語混植をおこなったのは幕末明治初期の辞書が最初ではありません。それは一六〇〇年をはさんだ前後二〇年間に刊行された「キリシタン版」が最初でしょう。キリシタン版の研究は、キリシタン版を多く收藏する天理図書館を中心におこなわれていたが、印刷方法を含む組版技術を正面から論じたものはなかったように思えます。研究者が印刷とくにヨーロッパの活版印刷術に暗かったということが問題でした。キリシタン版を印刷という視点から初めて切り込んだのが豊島正之氏の論考で、本書掲載論文の白眉と

いえます。豊島氏は縦組和文の中に混植された横組欧文のベースラインの位置に注目して、組版者の意識の変化から論を始めています。二七〇年ほどあとに刊行されたヘボンの『和英語林集成』も、活字による横組の和欧混植でしたが、組版でのベースラインへの配慮はありません。和欧混植で欧文の下位置の揺れをどうするかは今も大きな問題になっていますが、一七世紀初頭すでにデセンドーのない綴りの処理を意識していたという報告は衝撃的でした。研究者ばかりでなくデザイナーや編集者にとっても豊島氏の「キリシタン版の文字と版式」は大切な論文です。

大内田貞郎氏も長く「きりしたん版」に挑戦している研究者の一人です。論考「きりしたん版」に「古活字版」ルールを探る」は、豊富な資料に支えられた考察から、使用活字の父型・母型の制作と印刷機の導入そして印刷者に

視点を向けていく方法論は興味深いものです。日本に初めて導入されたヨーロッパの活版印刷術は、キリスト教禁止令のため日本の印刷・出版文化を大きく変える機会を与えられず、廃棄せざるを得ませんでした。短い稼働時間とあいまって現存する印刷物も少なく、また関係資料も発見されず、研究は思うように進みませんでした。いま新たな出発点に立ったということが期待できるでしょうか。活字印刷についてさらなる研究が期待できる分野に違いありません。

金属活字の持つ社会的文化的影響力を発揮したのが新聞でしょうか。活字を使って新聞を組むという方針で出したのが『東京日日新聞』です。しかし思うように活字が揃わず、断腸の思いで昔ながらの整版で創刊し、二号からなんとか金属活字で組むようになりましたが、必要な漢字がなくやむをえず仮名をあて、読者から「チンブン



◆◆ Web ページのご案内 ◆◆ <http://www.bensey.co.jp/>

近刊を含む書籍の内容紹介から、新刊・既刊書籍のご購入、最新ニュース・書評掲載情報など。

◆◆ ご注文方法 ◆◆

- ① web ページによるご注文 <http://www.bensey.co.jp/howtobuy.html>
- ② 電話・FAX によるご注文 電話：03-5215-9021 FAX：03-5215-9025

◆◆ お支払い方法 ◆◆

銀行振込・郵便振替・代金引換<sup>\*</sup>・クレジットカード<sup>\*\*</sup>等のご利用いただけます。  
(いずれの場合も、送料が別途 300 円かかります)

① 銀行振込の場合

三菱東京 UFJ 銀行麹町支店普通 3848245 ベンセイシュパン(カ)

② 郵便振替の場合

00120-3-41856 勉誠出版株式会社

\* 代金引換の場合、さらに 315 円かかります。(ご注文が 3,000 円未満の場合のみ)

\*\* クレジットカードのご利用は、当社サイトにてのご注文に限ります。

投稿募集

「勉誠通信」へのご寄稿を募集いたしております。

現在のご研究内容の紹介や、ご興味をもたれていることなど、ご自由にお書きいただければと存じます。

◆ 執筆分量…誌面二頁(一五〇〇字程度) ないし三頁(二三〇〇字程度)  
写真などが入る場合は、文字数をそのぶん減らしてください。

四〇〇字を目安に、適当な小見出しをお付けください。

◆ その他…適当なタイトルをお付けください。肩書きをご連絡ください。

◆ 入稿形式…テキスト形式(ワード、一太郎形式も可)

◆ 校正…原則として校正は無しとさせていただきます。

◆ 謝礼…ご執筆誌面一頁につき一〇〇〇円分のポイントをお渡しいたします。  
ポイントとは、小社の書籍を直販にてご購入いただく際にご利用いただけます。

◆ お問い合わせおよび送付先… [mnmtf@bensey.co.jp](mailto:mnmtf@bensey.co.jp)  
メールアドレスに「勉誠通信用原稿」と明記してください。

編集後記

蒸し暑い日々が続いておりますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。夏季休業中は父の実家に帰り、お墓参りをしてきました。学生の頃は持て余すほどだった休日も、今はとても大事に感じるようになりました。子どもの頃には、ただ怖く、めんどくさかったお墓参りも、大人になってみると故人と向き合え、しみじみとした気持ちになるものだと知りました。普段はあまり会うことのない親戚も一同に会し、思い出話に花が咲きました。みなが集まり、近況報告をすることが出来故人の思い出話をお盆という行事のいいものだなあと感じます。実家は、過疎化が進む田舎なのですが、懐かしい雰囲気の中、日々の生活に追われる日常から少し離れ、ほっと一息つけたような気がします。また働いていく元気を充電してまいりました。お盆を過ぎると、なんとなく空にも秋の気配を感じます。これから少しはすこしやさしい気候になっていくでしょう。季節の変わり目ですが、皆様どうぞお体ご自愛くださいませ。